

創刊 平成 14 年（2002）6 月 5 日



ちば環境再生県民の会

ちば環境再生県民の会 広報

・第 41 号 発行日・令和 2 年（2020 年）8 月 25 日発行

第 2 回ちば環境再生推進委員会概要

開催日時：書面による審議

（新型コロナウイルスの為に会議の招集は行われず書面による審議となった）

委員：田畑貞寿・榊渥俊子・橋立達夫・桑波田和子・中岡丈恵・宮島三郎・一法師雅巳・岩津由雄
・小茂田勝己・杉田昭義・冨塚昌子

1 令和元年度事業報告について

(1) 再生基金助成事業

助 成 事 業		助成数	交付金額(千円)	備考
県民の環境活動支援事業	10 万円以下	27	2,529	
	25 万円以下	19	3,500	
	25 万円以上	12	5,845	
提案型環境再生事業		0	0	
環境活動見本市等普及啓発支援事業		2	3,250	
未来の環境活動担い手支援事業		2	200	
廃食油燃料利用促進プロジェクト	回収/13 件	5	439	
	収集/5 件	0	0	
負の遺産対策事業		0	0	5 月・10 月募集
		67	15,763	

(2) 啓発・募金活動

① 募金の状況

341 件 5,532,979 円 (R2.02.29 現在)

※6 月環境月間に職場募金のお願い

② 感謝状贈呈

10 件

※環境生活部長より

R1.5.30 贈呈 1 社【イオンリテール（株）】

③ イベント参加

7 件

④ ちば犬着ぐるみ貸出 1 件

⑤ 助成事業の PR ※基金ホームページへ掲載、活動ニュース発行

(3) 助成金説明会及び活動成果発表会

- ① 日時・場所
令和元年 10 月 30 日 (水) 千葉市生涯学習センター
- ② 参加者
説明会出席者、成果発表者等 約 60 名

(4) 助成事業(R2 年度活動)の募集

- ① 募集期間
令和元年 11 月 1 日(金)～12 月 15 日(日)・・・当日消印有効
- ② 審査・交付決定
 - ・第 1 次審査 : R2 年 1 月 22 日
 - ・第 2 次審査、プレゼン : R2 年 2 月 27 日
 - ・交付決定 R2 年 4 月 1 日付け

<再生基金助成事業審査結果>

助 成 事 業		申請数	申請金額(千円)	備考
県民の環境活動支援事業	10 万円以下	31	2,895	
	25 万円以下	19	3,277	
	25 万円以上	17	6,831	
提案型環境再生事業		0	0	
環境活動見本市等普及啓発支援事業		2	3,000	
未来の環境活動担い手支援事業		2	200	
廃食油燃料利用促進プロジェクト	回収 /13 件	2	200	
	収集/5 件	0	0	
負の遺産対策事業		0	0	
		73	16,403	

2 令和 2 年度事業計画について

- (1) 再生基金助成事業
- (2) 啓発・募金活動
- (3) 令和元年度助成事業活動成果発表会の開催
- (4) 助成事業(2021 年度活動)の募集

* 皆様の大切な基金です、活動の原点立ち上げりに、活動の広がりに基金を応募をしてください。

地域の「共有知」とすべく、いすみ生物多様性テキストを作りました

～SDGsを見据え「プログレッシブ・ローカル」なまちづくりへ～

NPO 法人いすみライフスタイル研究所 副理事長 江崎 亮

地域での取り組みを地域の「共有知」とするためのテキストづくり
本広報 37 号「生物多様性の主流化と学校給食」、39 号「田んぼと里山と生物多様性」で房総野生生物研究所の手塚幸夫さんが述べられていたように、千葉県いすみ市では「自然と共生する里づくり連絡協議会」による、稲作と地域の自然と生物多様性を学ぶ「教育ファーム」というプログラムが、夷隅小学校で実施されてきました。また、この活動と並行して、地域での有機稲作普及の実践から収穫された有機米「いすみっこ」を 2017 年度から学校給食に使うという取り組みも行われています。さらに今年度からは、お米だけでなく有機野菜が学校給食に取り入れられるようになってきました。これらの動きについては、上記、手塚さんの寄稿文に詳しく書かれていますので、そちらをご覧くださいと幸いです。

さて、私たち NPO 法人いすみライフスタイル研究所は、上記連絡協議会メンバーの一員として 2018 年に市内で行われた「第 5 回生物の多様性を育む農業国際会議 (ICEBA) 2018in いすみ」の開催協力をきっかけに、本格的に「教育ファーム」と有機稲作・野菜づくりをサポートするようになりました。

「教育ファーム」の取り組みは、夷隅小学校の 5 年生を対象に行われてきました。「教育ファーム」では、市の農林課の職員や手塚さんがきちんとした資料を準備され、地域の農家さんたちの協力を得て、体系だった授業をされていました。それを見て私たちは、これをテキストとしてまとめることを思いつきました。そして、そのテキストを、夷隅小以外の地域の子供たちや大人たちにも配布して、地域の生物多様性のことや稲作のこと、学校給食で使われている有機米のことを知ってもらいたいと思うようになりました。そこで、2019 年度に地球環境基金の助成金をいただいて、このテキストを作りました。

いすみの 田んぼと里山と せふつたようせい 生物多様性



「いすみの田んぼと里山と生物多様性」編集委員会 編・著

1. みんなの未来を支えるお米「いすみっこ」

みなさんは「いすみっこ」という名称のお米を知っていますか。「いすみっこ」は、みなさんがいつも学校給食で食べているごはんに使われているお米です。

「いすみっこ」は、お米の品種の名称ではありません。作り方には特徴があるため、「いすみっこ」という特別な名前が付けられ、認定されています。

「いすみっこ」の正しい呼び方があります。



写真 1 「学校給食にも使われている「いすみっこ」

①「いすみっこ」の特徴その一

「農薬を全く使わないで稲を育てる」

お米づくりでは、稲の病気をおさえたり、害虫を殺したりするために、たくさん農薬が使われています。

農薬の量は、稲刈りや稲作、稲作などがあります。昔で農薬が半分に減ったように減ったのは 1990 年頃からです。

農薬を減らすことによって、お米づくりは楽になりました。以前よりずっと少ない人数でたくさん作るできるようになりました。

しかし、農薬によって農家自身が病気になるったり、田んぼに落ちたお米が食べられなくなったりという問題が起きました。

現在では昔に比べ、なるべく人の健康や生き物の命の多い農薬が使われるようになっていますが、

それでもこれらの問題を解決したわけではありません。

「いすみっこ」は、こうした農薬を全く使わずに作られています。

②「いすみっこ」の特徴その二

「化学肥料は使わずに有機肥料で稲を育てる」

お米づくりでは、稲を健康に育て、お米をたくさん作るために肥料が使われています。この肥料は大きく分けて 2 つあります。

③化学肥料

ひとつは化学的に合成された化学肥料です。化学肥料は、高効率で稲を育てやすい肥料です。

しかし、毎年たくさん使ってしまうと、川や地下水を汚してしまいます。

大人から子供まで読めるテキストに

テキストづくりにあたって注意したことは、小学校の高学年の子供たちが読んでもわかること、そして、市内の全小学校に配布することでした。そのため、夷隅小の先生の他に、長者小、東小の先生方にもご協力いただきました。また、実際の授業にも使っていただけるような工夫もしました。

それから、編集委員会の編集というかたちを取り、市や教育委員会を通じて教育機関や公共機関に配布していただきやすいようにしました。もちろん、市の農林課の皆さんにもご協力いただきました。おかげ様で、市内 9 小学校の 4～6 年生全員に、このテキストを配布することができました。

さらに、私たちが意識したのは、子供たちだけでなく、地域の大人の方々が読んでも手応えのあるものにするということでした。というのも、市内でも「教育ファーム」や学校給食

での有機米全量使用のことを知っている方が少ないというのが実情です。自然環境と生物多様性の教育・啓蒙と保全活動のためにもとても重要な取り組みであるにもかかわらず、地域の方々の多くがご存じないという状況があります。これは、とても残念なことです。できるだけ多くの大人の方々にも読んでいただき、知っていただくことで、このテキストに書かれていること

が地域の「共有知」として認識していただき、この取り組みがさらにやりやすくなるのではないかと考えたのです。そこで、予算の許す限りたくさん刷り、多くの場所で配布できるようにしました。



千葉日報に掲載された長寿小での新しい取り組みと本テキスト

その結果、今年度から夷隅小での「教育ファーム」の取り組みの一部を東小や長寿小で取り入れていただくことになり、さらには、その模様や本テキストを千葉日報に取り上げていただくなど、次につながる動きも出てきています。

まちづくりに SDGs の視点と「プログレッシブ・ローカリズム」の視点を

私たち NPO は、まちづくり団体として、地域の魅力の発掘とコンテンツ化、そして、情報発信をしてきました。その中で、これらの資源となるのが、地域の生物多様性とそこで暮らす人々のライフスタイルの多様性であることに気づきました。自然環境を大切にすることが、地域の価値を高めるということに気づいたわけです。そこで私たちは、まちづくりの一環として、これらの保全とそのための啓蒙活動にも取り組むようになりました。そして、そこで気を付けているのが、いたずらに過去を懐かしみ、自然回帰や過去の暮らしへと後ろ向きの回帰を志向するのではなく、持続可能なまちづくりを行うという観点から SDGs に取り組み、さらにこれまでの人間社会の知見を活かしながら時代とともに前に進むことのできるような「プログレッシブ (Progressive)」な地域づくり、つまり、「プログレッシブ・ローカリズム (持続可能に進歩する地域主義)」へ取り組んでいきたいと考えるようになりました。

今年度は、地球環境基金の助成を継続して受け、このテキストの韓国語版を作成しました。2018年に「ICEBA2018 いすみ」で場を同じくし、同じ稲作文化を共有する韓国の方々と、生物多様性と学校給食という視点から国際交流と情報交換をしながら新しい地域の立ち位置を模索する予定です。

テキストの問い合わせ、ダウンロードはこちらから：<http://www.isumi-style.com/>

おかげさま農場通信 (産地の声) vol.1447 2020年7月8日

高柳 功

「今年は梅雨らしい雨が降る年だな」「これで秋はそんなに来ないだろう」などと仲間内で話していたのですが、とんでもない雨続きが続いています。

しかも九州をはじめとした豪雨が切れ目なく続いています。これも異常気象の表れのようにですが、日本だけでなく隣の中国もひどい豪雨がが続いているようです。

九州の被害は、死者、家屋におよび被害の実態が判明しないほどのようです。今これを書いている最中のニュースで、再び(ではなく三度?)九州から関東にかけて線状降水帯が来る予報が流れています。

ここ千葉はそれほどではないのですが雨続きで仕事が進まず(ぬかるんで畑に入れない)一方日照不足で、夏野菜の成長が進まず、収穫が激減しています。九州のような被害から見ればまだマシと思っているのですが、それにしてもこの異常気象はどうしたことでしょうか。

地球温暖化に対しCO2の増加が叫ばれ世界的な課題として各国が目標を定め認識?している

はずですが一向に解決に向かっている様子はありません。

私たちが無農薬栽培を始めた訳は安全な食べ物を！などというのが目的ではなく、むしろ環境問題としての有機栽培、無農薬栽培でした。

それは、レイチェルカーソンの「沈黙の春」で指摘された、自然界に対して農薬（＝化学物質）の恐ろしさの警告です。地球に存在しなかったのものを人間は作り出してしまった。

しかもその化学物質が生態系の生き物を絶滅、あるいは生態系を狂わせる、ということが表れ始めたことから、自らが生業とする農の有り様を見直し、30年後50年後を見据えた農法というものをしていかなないと負の遺産を子孫に残してしまうのではないかと議論したものです（3.40年前のことですが）。

地上にばらまかれた化学物質（農薬）は、回収できない。地球レベルで食物連鎖の系があり、その一員として人間は生きている。生態系の系を逃れて人間は生きることにはできない。そして食物連鎖の系の中で農薬をはじめとする化学物質は生物濃縮という形で命を脅かす。別の例で、典型的な例が水俣病です。

ということで近代農法はいずれ破綻する。ではどうすればいいのか。ということで取り組まれて言ったのが有機農業であり自然農法であり、無農薬栽培だったと思います。いわば地球人として今後に禍根を残さない業をする者としての試みだったと思うのです。（話が飛びましたが、次回に続きます）

おかげさま農場

（産地の声） vol.1448 2020年7月15日

高柳 功

前回、次回に続くを書いてしまったので続きを書きます。

なぜ有機栽培なのか。人類は地球に存在しない物質を（重金属や化学物質など）作り出してしまった。それが地球の生態系を変え生物にとって取り返しのつかない環境（大地、水質、大気、海洋などの汚染）を作り出してしまふ。

よって、近代農法と言われるモノカルチャー農法、化学物質に頼る農法は食物連鎖、物質循環の流れを阻害する要因となる。何よりも人間のなせる行為が核と同じく人間に制御できないことはすべきではない。

前はそうしたことを書いたつもりです。そしてもう一つは、エネルギーの問題です。私たちは農に携わる者として食べ物を生産しています。40年前のことですが、ビニールハウスや温室と言った自然を制御する環境技術が推進されました。冬場のトマトの例として、生産されたトマトのエネルギーに対して使われたエネルギーを計算すると、なんと100倍のエネルギーが使われているというのです。

近代農業は70年代から急速に発達するのですが、お米にしてもそれ以前は0.7から0.8くらいの投下エネルギーで1のエネルギーが得られたけれど、逆転し始め1のエネルギーを得るのに1.2倍から1.5倍のエネルギーが使われるようになったと言うことでした。

現在どれくらいになるのか専門家の人に教えてほしいのですが、当時の私たちの考えは獲得エネルギーよりも投下エネルギーが多いと言うことはいずれ破綻するのではないかと、いうことでした。

私たち人間も生きているだけでエネルギーを消耗します。人間もその他の生き物も食べものがなければ死に至ります。自然の摂理の範囲ならばプラマイゼロで地球の大循環は続き環境は維持されます。

ですが、太陽エネルギーに頼る地球の生き物が、降り注ぐエネルギー以上にエネルギーを使ってしまったら地球環境のバランスが壊れます。そうならないためには天からの恵みに感謝し、自然の摂理に背かない農法の有り様をしていかなければならないのでは、といった考えでした。

今思うと、単に農の世界だけでなく人間の生きようそのものに同じことが言えると思います。未だ続く異常気象の原因はCO2の削減などではなく、人間の飽くなき欲望のために使いすぎているエネルギー消費が問題のような気がします。

そう思うのは世迷い言でしょうか。紙面の都合上ここまでです。

おかげさま農場

(産地の声) vol. 1449 2020 年 7 月 22 日

(産地の声) vol. 1450 2020 年 7 月 29 日片岡代筆

いつ梅雨が明けるのか見通しのつかない天候が続いています。それどころか昨年に続き九州から始まり、東北地方では豪雨の連続で堤防が決壊し、家屋が浸水、土砂崩れが発生するという異常天候の災難に見舞われています。

私は農家ですから、家々のことも気がかりですが、田んぼは大丈夫か、畑はどうか、と気になって TV 画面を見入ります。

今日の最上川の映像を見ていた連れ合いが「田んぼはどうなっているの？」と。田どころである山形県を思い出したのでしょうか、見ていたらアナウンサーが家屋浸水のことを報じていましたが、拡大画面になって田んぼが見え「ほらほら見てあれが田んぼよ、もう水につかってしまった田んぼはだめね！」と。

一面の泥水で覆われた田んぼはほぼ全滅のようすです。一部高台と思われるところは稲の緑が見えましたが、果たして実りになることを祈らずにはおれません。

7 月に入って九州地方の大洪水のさい滅多に取り上げられない農業災害についてアナウンサーが、「農家も大変です」と報じていましたが、農業を語る際それは農家の問題としてしまうこの国の意識の変化を感じます。

もう数十年前になりますが最初にフランスに行った時のことを思い出します。訪問した際一番に紹介されたことは「我が国は農業国です。欧州圏では最も自給率の高い国です」と誇りを持って紹介してくれたのです。

その後何度かフランスに訪れましたが、わかってきたことは農業に対する国民的反応の大きな違いです。日本という国の農業問題は、農家の問題として閉じ込めたものとしてしか意識形成されていない、と言うことです。

一方フランスの農に対する国民的反応は、今回のような災害があれば「大変だ。俺たちの食べ物はどうなるんだ！」と自分の問題としてとらえるのです。

同じ地球に住む人間としてこの意識の違いは何だろう？と思うのです。天の恵みに感謝して食事をいただくこと、そしてそれが我が命を守っていることを心の底に持っているように思えたのですが、考えすぎでしょうか。

日本人も半世紀前まではそういう想いであつたと思うのですが、いつのまにか農業がビジネスで語られ、食への感謝を忘れグルメ指向になってしまったのでしょうか。私の頭の中も何を語っているのか、カオス状態のようです。

かげさま農場

(産地の声) vol. 1451 2020 年 8 月 5 日

高柳 功

ようやく梅雨明けとなりましたが、早速の真夏日です。長い間太陽が出ず、かつ雨続きの過湿状態の中で、野菜たちは育たず、中には枯れてしまったものもあります。

キュウリやなすなど夏野菜は日照不足だととれません。成育が鈍化するのです。そして過湿日照不足によって病気や虫が蔓延しやすくなります。収量不足になっています。

今市場では野菜の高騰が伝えられています。と言って農家の収入が増えるわけでもありません。価格が 2 倍になったとしても半分しか採れなければ変わらないわけです。

おかげさま農場の仲間たちは市場で 2 倍 3 倍と高騰していたとしても、同じく例年並みに皆さんにお届けしています。農家の仲間たちも市場に出せば、と言う気持ちを持つこともあろうに、よく協力をしてきています。そうしたことを皆さんもわかっていたいただきたいと思うのです。

夏野菜だけでなく、ニンジンやジャガイモなども市場では例年の数倍の価格になっているという話も聞きます。それだけ品物が逼迫しているのでしょう。8 月になって夏日が始まりましたが、水稻の方は一斉に穂が出始め、早いものは頭を垂れています。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と言うことわざがありますが人間の方はいかなもののでしょうか。

私の今日は、お寺さんでのお施餓鬼会のおつとめでした。お盆を迎えての先祖供養です。毎年8月5日の催しで檀家の皆さんが供養に訪れます。私は役員ですのでお迎え接待します。

今年はコロナ騒ぎで参加者は少なかったので、お寺の屋根が雨漏りするからというので屋根に上りました。北側に山を抱いているので、雨樋に落ち葉がたんまりと溜まっていました。急遽箒や棒きれで掃除をすることになり雨樋の修理をすることになってしまいました。

住職との語りですが、近年仏教が語られなくなってしまっていることが、「誰でもいいから殺してみたかった」などと言う輩が出てきたのではないかと。私たちの命は自分のものであって自分のものではない。大地自然に生かされているということを失念した人間たちになってしまったのではないかと。などと。

仏教の五戒「不殺生」「不偷盗」「不邪淫」「不悪口」「不飲酒」 合唱 高柳 功

おかげさま農場 (産地の声) vol. 1452 2020年8月13日

高柳 功

猛暑が続いています。家から出て畑に出ただけで汗が吹き出します。野良にはクーラーなどありませんから野外は40度以上の気温です。

5月に蒔いた胡麻は7月の雨天続きでとろけてなくなってしまいました。種を蒔いて1週間くらいで順調に芽が出たのですが、雨続きの湿気過多のせいでしょう。胡麻は中東地区が原産地です。

いわば砂漠状態の地の植物です。

胡麻を作りたいという人が現れ一緒に種を蒔き、途中で草取りや元寄せなど管理していたのですが全滅状態だったので、再度挑戦してミニポットに種まきし苗になったところで今度は空いたハウスに植えることにしました。1週間ほどたったのですがさすが砂漠地帯の作物で水もかけずに見守っていたらなんとしっかり根付いています。問題なのは、根切り虫がでて数本食べられたことです。

思い返しますとこの産地の声で20年前くらいから異常気象だと騒いできたのですが、今はさらに異常が上昇し？地球全体にその影響が出ています。隣の中国でも豪雨と大洪水が、さらに韓国でも同じ災害に遭っていますし、今フランスでは40度以上の猛暑が記録され続けています。

そうした異常気象に加え、コロナウイルスという厄難が世界中を襲っています。コロナ騒ぎは私たちにはほとんど影響を受けないでいます。と言うのも私たちの相手は大自然であり、三密などと言う場合はほとんどないからでしょう。

いつもと同じく生活し、例年と同じく種を蒔き畑や田んぼを行き来しています。マスクなどすることなく「なんであんなに騒ぐのかねえ？」などとのんきな話をこんな塩梅です。

我が家はクーラーなどというのは自然に反すると設置してありません。昔作りの家なので戸障子を開け放てば風は家中を吹き抜けます。それでよしとしています。扇風機はあります。

都会では熱中症を防止するにはクーラーをつけてとTVで注意を呼びかけていますが、やむを得ないのでしょう。人間も自然界の一員であることを思うと人間以外の生き物は自然の中で生きています。クーラーがないと生きてゆけない社会の方が不自然と言ったら叱られそうです。ですが、そのクーラーというエネルギー消費が温暖化をさらに推進しているとしたら少しは人間社会の有り様を改める必要があると思うのですが、どうでしょうか。

いったん百年くらい前の時代を思い返しリセットする！なんてできないか。高柳功

オンライン開催のみとなったエコメッセ 2020in ちば

エコメッセちば実行委員会

谷合 哲

エコメッセ 2020in ちばは COVID-19 感染拡大の影響を受けて、オンライン開催を中心とした開催を検討しています。4 月から 8 月上旬まで感染拡大の状況を見守りつつ、規模の縮小や出展団体数の制限、参加者数の制限、会場内での感染対策など、かなり詳細な準備を進めています。今回のオンライン開催では、“エコメッセ SDGs チャンネル”と題して、各団体 3 分間の PR 動画を作成、提供していただき、これをエコメッセの HP 上で公開させていただきます。

オンライン出展の詳細はエコメッセの HP (<https://www.ecomesse.com/>) をご参照ください。

オンライン出展をされる団体の方は、次の 2 つの方法のいずれかで 3 分間の PR 動画を作成してください。①写真

(JPEG 形式で 10 - 18 枚) と説明文 (画像 1 枚あたり 20 文字程度) 事務局でスライドショー形式の 3 分間以内の動画に編集します。②動画 (3 分以内) ご提供データをそのまま登録します。またエコメッセちば実行委員会の紹介動画も公開していますので、動画を制作する上で参考にしてください。出展料は企業、行政 5,000 円、市民団体、大学 2,000 円、高校・大学生団体は無料です。(いずれも消費税込みの料金です。) 今後、with COVID-19 の時代がしばらくは継続することになると思います。各団体の活動も変化を余儀なくされるでしょうし、“市民活動”というものの自体が大きく変わらざるを得ない時を迎えていると思います。感染対策によって、人と人とのつながりがどんどん希薄になってしまいう中、様々な IT 技術を取り込んで、新しい“つながり”を保ち、広げ続けてゆく人たちもいます。またこの自粛期間を利用して、これまでの活動の記録を整理・公開してゆく人たちもいます。直接会って活動することはできなくても、様々な方法で“心と心の距離”を近づけることはできます。どのような時代になったとしても、それぞれの場所で、それぞれのやり方でそれぞれの活動を継続し、発信してゆくことが求められています。

そうした皆さんの活動を発信する場として、新しいスタイルを提供しようとしている「エコメッセ 2020in ちば」にご期待ください。

ことはオンラインでも開催

エコメッセ 2020in ちば

オンライン出展団体 募集中!!

初めてのオンライン出展!!

第25回エコメッセは、昨年同様メッセ会場の定員を超えてオンラインでも開催します。

新しい活動や団体紹介の場としてぜひ活用ください!!

オンライン出展募集要項

出展の各企業、団体のみならずSDGsへの取り組みや活動のホームページ内の「エコメッセ SDGs チャンネル」で公開いたします。

- この「SDGs チャンネル」は第25回エコメッセ開催の翌日より約1年間、無償です。
- 掲載された団体へのリンクは、HP内の「SDGs チャンネル」に自動的に追加されます。
- 申込み済みのメッセが「SDGs チャンネル」に掲載されます。

募集要項

応募はオンラインで以下のどちらかを選択してください。

- 写真 (JPEG形式で10-18枚と、説明文 (200文字以内))
写真の枚数により、自動的にSDGsのテーマ、掲載位置を決定します。写真の枚数により、自動的にSDGsのテーマ、掲載位置を決定します。
- 動画 (3分以内)
ご提供データをそのまま登録します。

出展料

企業/行政	5,000円 (消費税込み)
市民団体/大学	2,000円 (消費税込み)

※いずれも消費税込み

応募締め切り

写真募集の場合 — 9月15日(火)
動画募集の場合 — 10月1日(木)

応募方法

ホームページの「申し込みフォーム」から、詳細はホームページをご覧ください。

エコメッセちば実行委員会
〒280-0024 千葉県中央部中央部1-1-1
(一財)千葉環境再生財団 発行

ホームページ <https://www.ecomesse.com>
e-mail info@comesse.com
TEL 080-8874-0019

<https://www.ecomesse.com>

with COVID-19 時代の”居場所”について

居場所づくりの会代表 谷合 哲行

2020年度はCOVID-19の影響を大きく受けることになりました。緊急事態宣言も考慮して、4月5月は共同管理している”シェアスペース・なんか”の利用を停止せざるを得なかったし、上期(4-9月)については団体としての活動ができないことから会費を徴収せず、それぞれの団体がwith COVID-19の状況下でもできる活動方法を検討していただく期間としました。6月からは”シェアスペース・なんか”の個人利用から施設の貸し出しを再開し、現在は小規模・小人数の教室は再開しています。以前はlunch meetingや定例会後の食事会が一番の楽しみでもあり、会員の皆さんとの重要な情報交換の場になっていましたが、4月以降、感染防止の観点から、できるだけ飲食を伴わないように注意したり、飲食をする場合にも個別にお弁当を用意していただいたり、個包装のものを個別に配ったりという形をとらざるを得なくなっています。一方、6月の再開後、初めての定例会からzoomというTV会議システムを導入して遠隔地からもTV会議に参加できるような体制をとりました。このTV会議の導入によって、遠隔地にお住まいの関係者の方も定例会に参加できるようになりました。顔を見ながら近況を報告し合うだけでも”心の距離”がぐっと近づいて感じられるし、日本中どこにいたとしてもCOVID-19の影からは免れられないという現実も実感できる会になっています。

with COVID-19の時代にも、人は人との”つながり”を求めてゆくと思いますし、どんな方法であったとしても”心と心が通い合う”ことが求められます。これまでは主にヒトやモノの”居場所”に重点を置いた活動を展開してきましたが、これからは記憶や記録の”居場所”を提供するような活動が求められる時代になってくるのではないかと考えています。居場所づくりの会ではそうしたwith COVID-19の時代にも生き続ける皆さんを支援する団体になりたいと思っています。

もっと手賀沼を知ろう！・船上見学と水調べ・8月22日開催

- ・主催・手賀沼流域フォーラム松戸実行委員会・共催・松戸市
- ・後援・松戸市消費者の会・クリエイティブルまつど工房・NPOせっけんの街松戸
- ・ちば環境再生県民の会・つかいまわし工房

・六実市民センター3階に集合して開会

- ・今年の募集は特に三密を避けるために全体の定員の半分とさせていただきましたその為に一日で応募を締め切ることになりました。

私の所にお電話での申し込みは定員後でお詫びしました。(5組)

- ・会議室での事前学習は
- ・資料集として、昔(昭和)の六実の話、松戸市六実周辺のから河川図、を環境課と中岡が分担環境課が各定点を調べて表に記載、画像もポイントをカラー印刷していただきましたので、記入例を参考にして記入

検査の始めはバケツの水を汲んで

- ① 生き物を調べる川の付近の生き物を調べる、川の外のゴミも調べる
- ② 透視度計で水の汚れの程度を見る
- ③ 水の臭いをかぐ
- ④ 色を見る
- ⑤ CODの試薬を使い濃度を測る。

毎年定点11から13ポイントで5項目を調べ、排水の流れを追い駆け沼に向かいます。

*五香の家庭排水の流れ込むマンホールの中を見る事が子どもたちには理解しやすい

(その時にそうめんなどが流れて来ると)20数件の住宅街のポイントは、現場に行くのにバスが入らず、徒歩で20分ほどかかり、今回の歴史的暑さとコロナ対策の為に前日にポイントの観察をしていただいた環境課の心づかいに感謝です。最近毎年猛暑で地域の小中学生校にチラシを配布して参加を呼び掛けていますので毎年開催日の決定に悩みます

会員が当日朝汲んだ松戸市六からの家庭排水が合流する、鎌ヶ谷市北部公民館脇の大津川の橋上・下を計測して前日の値と、検査方法、CODの試薬検査方法もそれぞれが体験し・学習会は終了・2台のバスに分乗・見学会スタートです。

・本日のポイント①県立鎌ヶ谷西高校脇の排水路は、**松戸市と鎌ヶ谷市の市境**を流れている、昔小金牧野馬の水飲み場だったそうです。49年前に見た時には大きな湿地帯になっていました。大雨が降ると溢れてここを渡る道路や田んぼが冠水していました。手賀沼の汚染対策として松戸市は流域にある小河川の改良工事が始められ、ここは川底に砂利を敷いて周り2面はコンクリートの護岸の川として整備されました。それ以後ここに住宅やクリ、野菜畑が出来ました。

・道路の下を流れているので、見学が忙しいです。暑さで夏草が伸びて水くみが大変でした。

⑤項目を調べて、今年の水調べはここまでとし、バスに分乗をして手賀沼に向かいました。

・昼休憩・水の館で自由行動1時間

暑いので水の館の食堂と我孫子市農産物直売所で農家さんのお弁当を購入して3階にあるフリースペースに分れて食べました。ここは我孫子市手賀沼課が管理して三密にならないようにテーブルに仕切りを敷いて手の洗浄液も用意していただいていた有りました。

・集合時間になり、水の館の棧橋に船が付き徒歩で棧橋に向かい、ここでも水調べをしてから、船に乗りました。40人乗りの船は冷暖房完備の新設船でした。こども4人大人11人でスタート、沼の北側を東に向かいました。沼は風もなく、船は手賀沼で一番広い中央点に着きました。

・ここは、我孫子市湖北と沼南町（いまは柏市）に面した広さが約1Kほどある広い所です。

戦後の食糧難の時に田んぼに干拓前する前の沼は今の**手賀川**のあたりまで全部この広さでしたが今は沼ですから自然と狭まり900m程かな、40年ほど前からまだお元気でした深山手賀沼漁協組合長さんに年何回か木造船に乗せてもらい、大きな船では入れない沼の様子や汚染状況をいろいろと教えていただきました。（深山さんは手賀沼の浄化の為に漁協敷地内に沼の水を引き込み沈殿して流すプール状の施設を作る他様々な協力者）その時に此処の広い処には**沼南町側に渡し場**があり、船で手賀沼を渡り常磐線の**湖北駅に近い所に通う渡し場**までの交通のルートが有りましたよ。昔学校の先生たちが渡し船に乗り、大風が吹いて船が転覆し犠牲となり、漁協組合のなかに慰霊の碑を建て組合の人達がお守りしていますと言うことでした。

・それ以来、風が有る時は船を出さない誓いが今も守られています。・昨年この見学会の時に台風の大風が吹いて船は中止となり我孫子市鳥の博物館の見学をしました。

・この沼との境に水色の水門があり、木下ろしへと、またそこにも大きな水門があり利根川へと流れて行きます。・此処水門そばに「あけぼの橋」がかかり、ここから見る「初日の出」と日暮れには反対の柏方面に赤富士が見られます。とても綺麗です。

・話を船に戻します、ここ手賀沼中央定点では長灼でヘドロをとりました。始めて見るこどもたちはヘドロの臭いにおそろおそろでしたが例の検査では見て感じた事として、水を取り⑤検査項目をみんなで確認をして記入をしました。例年だと船の棧橋の対面、沼の北・柏市側にハスが広がりきれいな花を咲かせて蓮見の観光客もいました。蓮は、長い茎が伸びて繁茂し、漁師たちの船の航路を塞いで、3年まえの私たちの船上学習会では船のスクリュウが絡んで、抜け出せなくて迎える船に出してもらいました。それほど蓮の群落が今年にはなにもありません。また長いこと北へ帰らなかつた白鳥が沼の岸で卵を孵化して大家族になって住みついていたのに、その姿も2組しか見られず、渡り鳥の鵜が1羽と、サギ2羽と数がそれぞれ激減していました、**白鳥は沼の土手を登り、遊歩道と住宅街の間を散歩するところが見られて**、SNSでも流れていました。野犬などに襲われたか？とにかく手賀沼公園の方に4羽ほど確認をただけでした。猛暑で鳥たちもどこかに避暑に移動しているのか？・その代りいつも船の後ろを威嚇するように着いてくるだけのハクレンが、今年は80センチから2m越えの大きさのが船の窓ガラスにバシバシと体当たりして窓は開けられないほど迫り、こどもも大人もビックリ、怖がる子もいました。長い間でこのような事は初めてです。以前は船尾の所で跳ねていましたよねと聞くと、今年は異常ですと船頭さんも。餌になる魚が居なくなったのでしょうか。ハクレンは蓮のくきを食べますか？、猛暑が一時的に沼の現象をおかしくなったのでしょうか！

・ここから船は印西、白井、柏の行政地域を通り手賀沼大橋を通過して大津川の出口に行きました。

ここには「根戸下の定点」の看板が有ります。昭和 39 年まで柏市の小、中学校の水泳教室の場所でした。ここは昔きれいな湧水の多い大津川から流れて来る河口で、魚が見えて泳いでいました。今は水質が悪く泳げません、スタートの松戸、鎌ヶ谷、柏市と排水が集まるここ大津川の河口根戸下定点でもヘドロ、沼水を取り⑤項目の検査をして、六実の排水の長い旅の最後を見届けました。

- ・船は湖上園皆さんの出迎えを受けて皆無事に手賀沼公園棧橋に着きました。バスに乗り込み岐路に向かい六実市民センターで解散しました。参加の小学生は宿題はだいじょうぶかな！
- ・追加 手賀川から木下ろしに大きな水門があり、利根川からの水を導水して調製する柏市の北千葉導水のセンターまで 3, 20m の太い管を手賀沼の周りをまわす大工事は 10 年以上かかりました。
- ・北千葉ビクターから水は大堀川～流山市、松戸市と運ばれて北千葉導水排水機場まで行き松戸、流山から江戸川に流されて東京都金町浄水場で取水され、都民の水道水として供給されています。淀橋上水場が取り壊されて都民はそれに代わる水道水です。私は煉瓦造りの大きな淀橋浄水場に北区の小学校から写生遠足で行きました。そのころは美味しい水道水でした。(約 70 年前)
- ・そのころは手賀沼の魚を常磐線三河島駅前で販売や自転車に籠を積んで売りに来ていました。ざっこのつくだ煮、ドジョウ、ウナギ、フナ、ハゼの串焼きなどが好きでした。
- ・沼がワースト 1 の当時は毎日の生活排水が河川から流れ着いて蓄積し、沼は浅くなりヘドロ化。さらに沼に通じる小河川には不法投棄の自転車、畳、ボリの大きな風呂桶、工事から出た大型ごみの不法投棄が多く、漁協が船を出して除く作業をしていました。また沼底を深く掘る浚渫船が回収したヘドロをそのまま積みシートをかけて、少し後に粉末化する工場が大橋の傍今の道の駅の裏にあり、ヘドロは粉末化して沼南町の埋立てに、水の浄化にはホテイアオイを入れて汚染水を吸い上げると目に見えて大きくなり浄化？が見えました。そのホテイアオイを毎年とる作業には「水すまし号」という水草とり船が働いていました。それも終わりました。手賀沼の浄化作戦は流域の市町村、県、国と手賀沼を愛する人々が長い間様々に関り、努力と莫大な費用がつぎ込まれました。今ではできなかったかも。油断すると・新たに外来生物が静かに忍び寄ってきました。
- ・夏休みも小中高大の学生たち水の調べをまだしています。今年は夏休みが変則で今土日に。洗剤、シャンプー、飲料水持参のものを調べる学習会を重ねています。日々の生活のなかで水は一番大切です、捨てる水は・飲み水にもなります。水道水で美味しいお湯を沸かしていますか

手賀沼流域フォーラム松戸実行委員長中岡

つかいまわし工房と **SDGs**？資源の有効利用は古く～です。

衣類も、食材もつかいまわし工房中岡丈恵

着物は江戸時代は公家や武士の身分によりしきたりが有り地域、大名ごとに足袋を履けない身分と履けるようになって色で区別をされていたり、履物の種類、着物の色、布まで上下関係が有りました。当時の庶民は絹物は着れず、ワタ育て木綿を作り、麻の茎を引いて麻糸を作りアサ布を織り着ていました。明治になり公武が合わされ、着物に限らず生活にも公家や武士のしきたりが融合して、今もお雛様や人形に継承されていますように、様々な形で取りいれました。

・着物には、着る季節に合うような仕来たりが有ります。冬から春には「合わせ」と言い表布と裏布を合わせて 2 重に重ねた物を着ます、これは盛夏には単「ひとえ」という一枚物に浴衣が分りやすいのですが、風呂上りに湯あみとして木綿の生地で作られて家で着るものでした。外出着としては麻の上布や絹糸で織られた「絹」「シャ」という薄物の反物があります。

・これは余談ですが江戸時代？時代劇で長屋のおかみさんが上は「白い布で下は色のついた着物」を着ていたのですが目にとまった方は居ませんか。本来ならば 3 リーズンを通して長く来た着物を夏になると裏と表をはがして洗いはりをして秋に仕立て直すと言う事をしていました。要するに 1 枚に縫い合わせた着物をはがして 2 枚にして洗うところを、洗うのを少し送らせてそのまま着たということで、何枚も持たない人は 1 枚の合わせを工夫して大事に着たのですね。

この知恵は理に適っていたと思います。あまり外は歩けないでしょうが！

・外国船が着き、洋服様式、文化も取り入れられて、さらに明治の政治家や留学生、軍人が外国に行き帰国した人がお土産に持ちかえった洋服は、忙しく働く町人たちも動きやすいように和・洋に、

動きやすい物として受け入れられ仕事を持つ男性や、学校の制服、看護婦さんなど働く場で取り入れられ、とくに女性には**普段着は簡単服へと！**。昭和の第二次大戦後は洋裁専門の布地屋さんも出来て、ますますと子供たちにも動きやすく、高価な洋服が手作りして着せるようになりました。という具合に私たちの衣類だけでも時代と共に変化してきました。始めのころは洋裁学校で習い自分のものは作れるようになると、人のものを練習だからと縫い、手ごろな婦人服専門の洋服屋さんや、様々なサイズの既製品も多くなり増えてきました。何着ても良い、自分が着たいものを着れる幸せなことです。

そして洋服は着物と同等の礼服としての扱いが広がり、いつの間にか着物が冠婚葬祭用だけに用意されて普段着を着る機会が少なくなりました。今 60 歳以上の方々は特に着物を嫁入りの時に持参して高価な品物がそのまま箆笥にと言う方が多いようです。わたくしなど明治、大正、昭和と生きて来た母のものが手元にあります。そこで箆笥に眠っていた思い出の着物たちに風を充てて「思いきり良く」今様に仕立て直して着る事を提案しています。着物は洋服と異なり、解いて洗い仕立て直しが出来るので男・女・こどもの区別なく「つかいまわす」事が出来ます。

- ・もったいないと箆笥の中に置いて置くは、誰も同じ境遇です。実は私もそうです。

- ・つかいまわし工房はスタートして 22 年になりました。

始めは松戸市民活動サポートセンターでの講習会として広報での募集に 30 名ほどが集まり、大騒ぎをしました。そこで定員を決めて月 2 回の教室としました。最初は 7 教室 10 名以上もできて各教室ではそれぞれに特色がありますが過去にとらわれず、年齢（当時 26 歳から 94 歳）もあり、持参した着物を広げて分けあい、支えあいながら作業をしています。今は教室により初心者・上級とに分けているところもあります。

- ・松戸市ではコロナで 3 月～休みでしたが 7 月より条件付きで再開され六実市民センター、矢切サポセンも教室が再開しました。

- ・矢切サポートセンター主催事業の「レッツ体験」の受け入れも開始されましたが、コロナが災いして受け入れ団体も少なく、また学生たちの夏休みが変則で集まらない為に「つかいまわし工房」サンドレス作りと「ちば環境再生県民の会」では環境教育として水調べ（家庭から流した水と川の水きずきの授業）9 月 10 月土・日に受け入れました。

- ・いずれも三密にならないようにサポセン教室では 20 名定員の室に 4 人を受け入れましたが当日応募者は一人でした。始めは着物の柄を選び、着丈を決めて裁ち、袋状に縫い頭と手が出る状態に？そうです巻頭衣のカンタンなデザインです。首のまわりを別布バイヤスでくるみ、手縫いで仮縫いをしてからミシンで本縫いと言う工程ですが、手縫いは初めて、仮縫いのマチ針を付けるのも初めて、ときに指に刺して痛い思いも苦勞して、慣れてきて、共布でポケットを付けると予定の時間内に菊五郎格子の浴衣から可愛いサンドレスが仕上がりました。

- ・六実の定例教室では大学生 1 名受け入れました。・応募の高校生は 3 人とも県立六実高校在学、通学は流山市、柏市、松戸市からでした。これまではサポセンを借りて 3 日から 5 日間の受け入れをしていましたが、今年は教室ごとに受け入れをしました。これからの申し込みが有るそうです。今年は定例の松戸サポセン教室でも受け入れました。その中に中学生の時から参加の学生が大学生になり応援に。これから 9 月、10 月に各 2 名を受けいれています。

- ・例年だと江戸川花火大会を見るために出来たてのドレス？を着て花火大会に行くことが楽しみだったのに中止となり残念でした。資源循環の小さい作業ですが、中には将来こどもに作りたいと言う学生も、母から娘へとつながる家の中での様々な手作業が急激になくなりました。コロナと猛暑で外出がままならず個人ではどうにもならない事が多い時こそ、細やかな気配りで物を大切に女性になってほしいと願います。（男子も参加していました）

ちば環境再生県民の会広報・第 41 号・発行日：2020 年・8 月 25 日

会費：個人会員：1 口 1,000 円以上・団体会員：1 口 2,000 円：賛助会員：1 口 3000 円以上

：寄付金など郵便振替口座番号：00140-4-545339・加入者：ちば環境再生県民の会

発行者：ちば環境再生県民の会発行責任者・中岡丈恵〒277-0803 松戸市六高台 4-154

電話/FAX：047-385-8950 E-mail：naka.hta@kzc.biglobe.ne.jp